



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アプロディシアスのアレクサンドロス 『運命について』 日本語訳・注(Ⅱ)
Author(s)	近藤, 智彦
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 145, 1(左)-32(左)
Issue Date	2015-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.145.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58314
Type	departmental bulletin paper
File Information	145_02_kondo.pdf



アプロディシアスのアレクサンドロス 『運命について』 日本語訳・注 (Ⅱ)

近 藤 智 彦

(承前)

【運命論に対する批判Ⅱ：思案と行為】

XI [178.8] あらゆるものが何らかの先行し限定された先在する原因の結果として生じる¹ということから、人間が自分の行為すべきことについて思案すること (βουλεύεσθαι) もまた無駄だということが帰結する²。だが、もし思案することが無駄ならば、人間が思案能力を有する (βουλευτικός) こと³が無駄になるだろう⁴。しかしながら、もし、自然本性は主導的 (προηγούμενον)⁵

【方針】

- ・本篇は、近藤智彦・杉山和希「アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』日本語訳・注 (Ⅰ)」『北海道大学文学研究科紀要』142 (2014)、左 1-左 32 [以下「日本語訳・注 (Ⅰ)」] の続篇である。
- ・方針の詳細については前篇「日本語訳・注 (Ⅰ)」を参照のこと。

【注】

- ¹ 底本に従い *ἔσεσθαι* を *ἐπεσθαι* (Bruns, fort.) と読む。
- ² アリストテレス『命題論』18b26-36, 19a7-9。
- ³ アリストテレス『動物誌』488b24-25。
- ⁴ 底本に従い *μάτην* <ἀν> ἄνθρωπος (a¹²) と読む。
- ⁵ 「主導的 (προηγούμενος, προηγούμενως)」については、「日本語訳・注 (Ⅰ)」注 45 を参照。「主導的」と「付随的・付属的」との区別は、ストア派に由来するか (オリゲネス『ケルソス論駁』4.74=SVF II.1157, ストバイオス『抜粋集』2.63.6-25 Wachsmuth=SVF

にあるかぎりの何ものも無駄に作出することはなく⁶、また、人間が思案能力を有する動物であることは自然本性によって主導的に（προηγουμένως）そう生じているのであって、主導的に生じるものごとに何か付随したり付随したりする仕方（κατ' ἐπακολούθημά τι καὶ σύμπτωμα）生じているのではないならば、人間が思案能力を有することは無駄ではないということ⁷が導出されるだろう。

[178.15] あらゆるものごとが必然的に生じるならば思案することが無駄になるということは、思案の用途を知っている者には容易に分かることである。誰もが賛同しているように、他の動物よりも優れた点として、人間には次のことが自然本性から与えられている。すなわち、表象（φαντασία）に他の動物と同じように従うのではなく、選ばれるべき（αἰρετόν）ものとして[表象される]何らかのものごとについての入り込んでくる表象の判断者として、理性（λόγος）が自然本性から与えられているということである⁸。人はその理性を用いることにより、表象対象が吟味の結果、当初現われたように実際にもある場合には、その表象に同意（συγκατατίθεται）して表象対象を追い求めるが、当初とは異なるものとして現われたり、他のものの方がより選ばれるべきものとして現われたりする場合には、当初選ばれるべきものとして現われたものを離れて、そちらを選ぶ（αἰρεῖσθαι）のである。事実、多くのもの

III. 280, エピクテトス『談義』2.8.6, ゲッリウス『アッティカの夜』7.1.7-13=SVF II. 1170 他)。

⁶ アリストテレス『天界について』271a33, 291b13-14, 『魂について』434a31, 『動物の諸部分について』658a8-9, 661b23-24, 『動物の発生について』741b4-5, 744a36-37, 『政治学』1253a9, 1256b20-21。

⁷ 底本に従い ἄν <τὸ> μὴ (add. a¹²) と読む。

⁸ 外的状況によって与えられた表象に応じて「同意（συγκατάθεσις）」（「承認」とも訳される）をするか否かという局面に、他の動物とは異なる理性的な人間の特質を見る考え方自体は、ストア派に由来する（エピクテトス『談義』1.6.12-22, 2.8.7-8 他, マルクス・アウレリウス『自省録』3.16, オリゲネス『原理論』3.1.2-3=SVF II. 988, 3.1.5=SVF II. 990 他）。ただし、思案能力を重視する考え方は、アリストテレス『魂について』434a5-8 などによるか。

ごとが、理性による吟味の結果、最初の表象とは⁹異なるようにわれわれに思われ、もはや当初の把握¹⁰のままにとどまらないものなのである¹¹。それゆえ、それらの表象に依るかぎりでは行為されたであろうことが¹²、それらについて思案したがゆえに行為されないことになるわけだが、それは、思案することと思案から帰結したことがらを選ぶこととを、われわれが左右しているためなのである。

[178.28] それゆえ、永遠的なものごとや、必然的に生じると同意されているものごとについては、それらについて思案してもわれわれに何の役にも立たないため、われわれは思案しないのである¹³。また、必然的に生じるのではないが他の人々次第であるものごとについては、やはりそれらについての思案はわれわれに何の益もないため、われわれは思案しない。また、われわれに行為可能ではあっても過去となったものごとについては、やはりそれらについての思案はわれわれに何の得にもならないため、われわれは思案しない。われわれが思案するのは、われわれによって行為される将来のものごとについてのみであるが、それは明らかに、そのこと[思案]がそれらを選んで行為することに対して何かしら役に立つだろうとみなしてのことである。

[179.3] 実際、思案することが単に思案したことそれ自体¹⁴ 以上にはわれわれに何の役にも立たないような場合には、われわれは思案しないわけだが、

⁹ 与格形の ταῖς πρώταις φαντασίαις（「最初の表象」）を ἄλλοῖα（「異なる」）につなげて読む（この点については Thillet がおそらく同じ解釈をとっている）。Sharples, Zierl, Natali は、「最初の表象においては異なるようにわれわれに思われたが」のように解している。

¹⁰ 「先取観念（πρόληψις）」（「日本語訳・注（Ⅰ）」注 14 参照）と同じ語であるが、ここでは一般的な意味で用いられていると考えられるため、このように訳しておく。

¹¹ 格言的アオリストと解する（Thillet, Zierl, Natali）。Sharples は過去時制で「とどまらなかった」のように訳している。

¹² 底本に従い γενομένη は読まない（del. V, om. lat.）。

¹³ アリストテレス『命題論』18b26-36, 『ニコマコス倫理学』1112a21-34, 1139b7-11, 1140a31-b4, 『エウデモス倫理学』1226a20-b2。

¹⁴ 底本に従い ἐκ τοῦ βουλευέσθαι <τοῦ βουλευσασθαι> αὐτοῦ μόνου（Hackforth）と読む。

そうであれば、実際にわれわれが思案する場合に¹⁵、思案することが思案したこと以上に何かしら役に立つだろうからそうするのだということは明らかである。なぜなら、前述のような他のものごと¹⁶について思案する者にも、思案したことそれ自体はもたらされるからである¹⁷。

[179.8] では、思案からもたらされることとはいったい何であろうか。それはすなわち、行為すべきことを選ぶ力能 (ἐξουσία) をわれわれは有するがゆえに、もし思案しなかったならば行為しなかったであろうことを——[思案しなかった場合には] 入り込んできた表象に屈することによって、他の行為をすたさるから——、そのことの方がより選ばれるべきものとして理性を通じて現われた場合には、代わりに選んで行為する、ということである。こうしたことが生じうるのは、われわれが必然的にあらゆる行為をするわけではないならばの話であろう。もしわれわれが何らかの先行原因ゆえにあらゆる行為をするのであって、これこれの行為をすることもしないこともできる力能をまったく有することなく、決定どおりに各々の行為をするのならば——ちょうど、熱する火や、下方に移動する石や、斜面を転がる円柱のように¹⁸——、将来なされる行為について思案することが、われわれの実際の行為に対して何の役に立つだろうか。というのは、思案しなくても行為したのであ

¹⁵ 底本に従い ἐν οἷς βουλευόμεθα の前後にコンマを打つ (Hackforth)。

¹⁶ 上の [178.28] の段落で挙げられた永遠的なものごとや必然的に生じるものごとなどを指す。

¹⁷ 底本に従い ἐπ' αὐτό τε を ἐπεὶ αὐτό γε (Apelt, Hackforth) と読む。

¹⁸ ストア派のクリュシッポスは、人間の心の性向を円柱や円錐の形と類比させつつ、人間の同意・意欲や行為は各人の性向次第であるという意味で「われわれの力で左右される (in nostra potestate)」ものである、と論じていた (キケロ『運命について』41-43=SVF II. 974, ゲッリウス『アッティカの夜』7.2.6-14=SVF II. 1000)。ただし、ストア派の哲学者ピロパトルに由来すると推測される議論 (以下 13 章、注 43 参照) と類似したマルクス・アウレリウス『自省録』10.33.3 (偽アリストテレス『宇宙について』398b28 も参照) の中に「円柱」への言及があることを考えると、アレクサンドロスがここで直接念頭に置いているのはおそらくピロパトルの議論と考えられる (Bobzien, 1998.1, 394-396)。

ろうことを、思案した後にも行為することが必然であり、したがって、思案したことから思案したことそれ自体以上のことは何ももたらされないからである¹⁹。しかしながら、思案することはわれわれ次第でないものごと²⁰の場合も行うことはできるものの、そのような思案は無益とみなしてわれわれは拒否するのである。よって[運命論者の説に従うと]、われわれに何らかの益をもたらすとみなしてわれわれが思案を用いている場合ですら²¹、思案することが無益となってしまうだろう。

[179.23] 以上のことから²²、自然本性によってわれわれが思案能力を与えられたことは無駄であるということが帰結する。だがこれに加えて、彼ら自身を含めたほぼすべての哲学者たちの共通見解となっていること²³、すなわち、自然本性によって生じることに無駄なものは何もないということを考え合わせるならば²⁴、われわれが思案能力を有していることは無駄だという帰結をもたらすような前提が否定されることになるだろう。だがまさにこの帰結[われわれが思案能力を有していることは無駄だということ]が、われわれは自分自身によって行為されるものごとについてそれと対立することもできるような力能を有していないという前提から、導かれてしまうのである。

XII [180.3] すでに示されたように、彼らに従うと思案が否定されるが、

¹⁹ 運命論によると思案が無益なものになってしまうとする議論は、ストア派の運命論に対する批判としては不当であるように思われる。クリュシッポスによる「怠惰な議論(ἀργὸς λόγος)」の論駁は(キケロ『運命について』28-30=SVF II. 956, オリゲネス『ケルソス論駁』2.20=SVF II. 957, エウセビオス『福音の準備』6.8.27-29=ディオゲニアノス断片 3 Gercke=SVF II. 998), まさにこうした運命論に対する誤解を解こうとする試みだったと考えられるからである(Meyer 1998, 225-227)。ただし、この点に関して、アレクサンドロスの共有するアリストテレス的観点に好意的な解釈の試みとして、Broadie 2001。

²⁰ 底本に従い τῶν <οὐκ> ἐφ' ἡμῖν (add. Lond. O.) と読む。

²¹ 底本に従い τὸ βουλευσασθαι の後にコンマは置かない。

²² Bruns は、[178.8] の段落と内容上重複することから、この段落が後世の付加ではないかと疑っている。

²³ 例外として考えられているのはエピクロス派であろう。

²⁴ =SVF II. 1140。

われわれ次第のものごとともまた否定されることは明らかである。というのも、特定の立場を固守しようとするのでもないかぎり万人が受け入れるところでは²⁵、われわれ次第のものごととは、われわれの外的状況をなす原因に導かれるまま従ったり屈したりすることなしに²⁶、それが行為されることも行為されないこともわれわれが左右しているものごとのことだからである²⁷。そして、人間に特有の機能(ἔργον)である選択(προαίρεσις)も、同じものごとを対象とする。すなわち、思案に基づいて予め判断されたことを欲求とともに意欲すること(ὁρμή)が、選択なのである²⁸。それゆえ、選択がなされるのは、必然的に生じるものごとについてでも、必然的ではないがわれわれを通して生じるのではないものごと²⁹についてでもなく、また、われわれを通して生じるものごとのすべてにおいてでもなく、われわれを通して生じるものごとのうち、それを行為することも行為しないこともわれわれが左右しているものごとにおいてなのである。

[180.12] 何らかのものごとについて思案する者は、そのことを行為すべきかすべきでないかを思案するか、あるいは、何らかの善をめざして励んで

²⁵ 165.17-19 (『日本語訳・注 (I)』注 16) を参照。一般通念に反したパラドクスを説くストア派を暗に批判しているか。アリストテレス『ニコマコス倫理学』1096a1-2, 『エウデモス倫理学』1217a10-14。

²⁶ 底本に従い ἢ ἐκεῖνα ἄγει の後にピリオドを打つ。

²⁷ アリストテレス『ニコマコス倫理学』1113b6-14, 『エウデモス倫理学』1222b41-1223a9。ただし、アリストテレスは「行為するか行為しないか」が「われわれ次第」であると論じるとどまっていたのに対して、アレクサンドロスは以下でこれを相対立する行為を選ぶことのできる力能として捉え直していく(例えば 181.5-6)。ここに、アリストテレスには少なくとも明確には見られなかった(非決定論的な)自由意志と呼ぶうる考え方が姿を現わすことになる(Donini 1987.2(2011), 145-149, Bobzien 1998.1, 396-412, Bobzien 1998.2, Frede 2011, 95-101, 神崎 2014, 441-442)。

²⁸ アリストテレス『ニコマコス倫理学』1113a9-11, 1139b4-5。「意欲(ὁρμή)」(通常「衝動」と訳される)という語はアリストテレスにも見られるが(『ニコマコス倫理学』1102b21, 1116b30, 1180a23, 『エウデモス倫理学』1224a13-b15, 1247b18-1248a2, 1248b3-7), ここでの使用はストア派の影響下にあると考えられる。

²⁹ 底本に従い μὴ δι' ἡμῶν <δε> (add. B²; exhibit lat.) と読む。

いて、いかなる手段でそれを得られるかを探求するかのいずれかである³⁰。探求の際に何か不可能なものごとに行き当たった³¹場合にはそこから離れ、また同様に、可能ではあるがその人次第ではないものごとからも離れ、何らかそうする力能を自分が有していると信じているものごとに行き当たるまで、設定された目的（προκειμενον）に関する探求を続ける。その後、行為の始源（ἀρχή）となるもの³²へと探求を帰着させたとみなしたときに思案するのをやめ、設定された目的に向けての行為を始めるのである。また、そもそも探求がなされるのも、相対立することも行為できる力能を自分が有しているとみなしてのことである。というのは、思案の対象となる個々のものごとに関して探求が生じるのは、「これこれのことと、それと対立することとの、どちらを私は行為すべきか」と思案する場合だからであり、それはあらゆるものごとが運命に即して生じると主張しようとも変わりはないのである。

[180.23] というのは、行為されうる事柄のうちに示された真理が、それらについての過った信念を反駁するからである。あらゆる人間が自然本性によって共通にこのような錯誤に陥っていると論じることが、どうして奇妙でないことがあろうか。われわれの抱いている先取観念によると、われわれは行為されうる事柄においては対立することを選ぶことのできる³³力能を有しており、また、われわれが選ぶことのすべてがそれを選ばざるをえないようにわれわれを仕向ける先行原因を有しているわけではないとされるのだが、そのことは選んだことに対してしばしば後悔が生じるという事実によっても

³⁰ 第二の「何らかの善をめざして励んでいて、いかなる手段でそれを得られるかを探求する」という説明の方は、アリストテレス『ニコマコス倫理学』1112b11-1113a7、『エウデモス倫理学』1227a5-21, 1227b22-36 による。これに対して、「そのことを行為すべきかすべきでないかを思案する」という行為選択の局面を強調した説明が第一になされている点に、アレクサンドロスの特徴を見ることができだろう（Donini 1987.1, 84 n.14, 近藤 2008, 11-13）。ただし、第一の説明に類似の表現も、アリストテレス『魂について』434a5-8 に見出される。

³¹ 底本に従い τύχη を ἐντύχη（Bruns lat. Donini）と読む。

³² 底本に従い ἐφ' [αὐτό,] ὁ ἐστίν（Donini）と読む。

³³ 底本に従い διαπείσθαι を αἰρεῖσθαι（Bruns conl. in app., lat.）と読む。

十分に示されている。なぜなら、そのことをわれわれが選ばないことも行為しないこともできたとみなすからこそ、われわれはそのことを後悔し、思案が足りなかったと自らを咎めるからである。また、他の人々が行為すべきことについて立派な判断を下さないのを見るときに、われわれが、彼らは過ちを犯していると非難し、これらの人々は助言者に頼るべきだと考えるのは、自分に対して助言してくれる人を求めることも求めないことも³⁴、また³⁵、そのような人が傍らにいれば実際にする行為とは異なることも³⁶行為しうるだろうということも、われわれ次第だとみなしてのことなのである³⁷。

[181.5] しかし、われわれ次第[という語]が、相対立することも選ぶ力がわれわれの内にあるかぎりのものごとについて述定されるということは、ことがら自体³⁸からも明らかではあるが、以上の論によっても十分に確認することができただろう。

XIII [181.7] これ[われわれ次第のものごと]は以上のようなものであるのだが、あらゆるものごとが運命に即して生じると論じている人々は、そのような主張にしたがってもこれ[われわれ次第のものごと]が確保されるということを、そもそも示そうと試みもしない(実際、それが不可能な試みになる³⁹と知っているからだが)。その代わりに、ちょうど偶運の場合に彼ら

³⁴ 底本に従い ἀξιοῦμεν δὲ συμβούλοις τοιοῦσδε [τοιοῖσδε libri] χρῆσθαι ὡς ἐφ' ἡμῖν ὃν τό τε παραλαμβάνειν αὐτοῖς συμβουλευόντας [αὐτοὺς συμβούλους ὄντας libri] ἢ μὴ παραλαμβάνειν (Bruns fort., Apelt) と読む。Thillet は ἀξιοῦμεν δὲ συμβούλοις τοιοῖσδε χρῆσθαι ὡς ἐφ' ἡμῖν ὃν τό τε παραλαμβάνειν αὐτοὺς συμβούλους ὄντας ἢ μὴ παραλαμβάνειν, <ὡς ἔχοντες ἐξουσίαν> τοῦ πράξει αἶν と読み、「助言者として彼らを求めることも求めないこともわれわれ次第であるような、そのような助言者に頼るべきだとわれわれが考えるのは、そのような人が傍らにいれば実際にする行為とは異なることも行為しうる(という力を有している)とみなしてのことなのである」と解している。

³⁵ 底本に従い τοὺς を καὶ τὸ (Bruns, fort.) と読む。

³⁶ 底本に従い ἄλλα καὶ τινὰ (καὶ del. V¹y, exh. a¹²) を καὶ ἄλλα τινὰ (Donini, ex lat.(GO)) と読む。

³⁷ アリストテレス『ニコマコス倫理学』1112b10-11。

³⁸ 底本に従い αὐτοῦ を αὐτοῦ (Donini, ex lat.) と読む。

³⁹ 底本に従い ἐγχειρήσαντας を ἐγχειρήσοντας (B²) と読む。

が為していること——すなわち彼らは、偶運という語に何か他の意味をあてがうことで、偶運的に生じるものごとがあるということを彼らもまた確保しているかのように、彼らの議論を聞く人々を欺こうとしているのだが⁴⁰——それと同じことを、われわれ次第のものごとの場合にも為している。すなわち⁴¹、人間が相対立することを選んで行為する力能を有していることを否定する一方で、われわれ次第のものごととは「われわれを通して⁴²生じるものごと」であると論じるのである⁴³。

[181.15] 彼らは次のように主張している。存在したり生じたりする様々なものごとの自然本性の間にはそれぞれ違いがある（魂のあるものと魂のないものとはその自然本性は同じではなく、魂のあるものすべての自然本性が同じわけでもない。存在する諸々のものの形相の点での差異が、それぞれの自然本性の差異を示すからである）。そして、各々のものによって（ὕπὸ）生じるものごとは、各々に固有の自然本性に即して生じる（石によって生じるものごとは石の自然本性に即して、火によって生じるものごとは火の自然本性に即して、動物によって生じるものごとは動物の⁴⁴自然本性に即して、というように）。したがって、各々のものによって各々に固有の自然本性に即して生じるものごととは何であれ、他の仕方であることはありえず、それらによって生じる各々のものごとはすべて必然的な仕方（κατηναγκασμένως）

⁴⁰ VIII 章 [173.20] の段落を参照。

⁴¹ 以下、=SVF II. 979。

⁴² 底本に従い καὶ を削除（B² Gercke Donini; om. lat.）。B² の余白には「もしかしたら『われわれ次第のものごととは『運命によってもわれわれを通して生じるものごと（τὸ ὑπὸ τε τῆς εἰμαρμένης γινόμενον καὶ δι' ἡμῶν）』であると論じる』と言うべきか」（すなわち下線部を挿入する提案）とある。

⁴³ 以下 181.13-182.20 は、エメサのネメシオス（後 3-4 世紀）『人間の自然本性について』35 章 105.6-106.13 Morani=SVF II. 991 において、クリュシッポスとピロパトル（後 2 世紀初頭か）などのストア派の哲学者に帰されている議論と酷似している。両資料は、ピロパトルがおそらくクリュシッポスの「円柱の類比」の議論（注 18 参照）などに基づいて展開した議論を、かなり忠実に紹介したものと考えられる。詳しくは Bobzien 1998.1, 358-412。

⁴⁴ 底本に従い ὑπὸ を削除（om. lat. Cas.O y）。

生じる — 「強制的 (ἐκ βίας)」 という意味での必然によってではなく、そのような自然本性をもつものにとっては⁴⁵ その時点でそのような仕方以外の別の仕方でも動くことは不可能である (状況はそのものによってそのような状況ではないことが不可能であるような⁴⁶ ものだから) という意味での必然によって⁴⁷ —、と彼らは主張するのである。なぜなら石も、高所から放たれたならば、妨げるものが何もないかぎり下方に移動しないことはありえないからである⁴⁸。実際、石は自らの内に重さを持っており、重さはそうした運動 [下方移動] の自然本性に即した原因⁴⁹ であるから、石の自然本性に即した運動に協働する外的原因も臨在するときには、石は必然的に自然本性的な仕方でも移動するのである。しかし、それゆえに石がそのとき動く原因が石に臨在することも、絶対的であり必然的であって⁵⁰ — それら [外的原因] が臨在する際には⁵¹、石が動かないことは不可能である⁵² ばかりでなく、そのとき必然的に動くのであるが⁵³ —、そうした運動は運命によって (ὕπὸ) 石を通して (διά) 生じるのである。他のものについても同じように論じられる。また、魂のあるものの場合にも、魂のないものの場合と同じことがあてはまる、と彼らは主張する。すなわち、動物にとっても自然本性的な運動があり、それは意欲 (ὁρμή) に即した運動である。というのは、あらゆる動物が動物としておこなう運動とは、運命によって動物を通して生じる意欲に即した運動⁵⁴ だから、というのである。

⁴⁵ 底本に従い μὴ を δὴ (Gercke) と読む。

⁴⁶ 底本に従い ὥς を付加 (add. Lond.O)。

⁴⁷ IX 章 175.5-7 を参照。

⁴⁸ 底本に従い ἐμποδίζοντος· τῷ <γάρ> (Arnim) と読む。

⁴⁹ Zago 2012, 376 n.41 に従い ταύτην δ' εἶναι τῆς τοιαύτης κινήσεως κατὰ φύσιν <αἰτίαν> [add. B²] と読み, ταύτην δ' εἶναι <τὴν> [add. Bruns] τῆς とする底本の挿入には従わない。

⁵⁰ πάντως から τότε までを括弧に入れる底本の指示 (Arnim) には従わない。

⁵¹ 底本に従い μὴ を削除 (om. A¹ Lond., secl. O Bruns)。

⁵² 底本は δυνάμενον (a¹²: δυνάμενων V(supr. v: ι V¹)B¹ES) と読んでいるが, δυναμένω (H ut vid., Gercke, potente lat.) と読む (Zago 2012, 376-377)。

⁵³ Zago 2012, 376 に従い κινεῖσθαι を κινουμένω と改変。

⁵⁴ 底本に従い τὴν を付加 (add. B²)。

[182.8] このようにして、世界における様々な運動や活動は運命によって生じるが——例えば、土を通して生じるものも、空気を通して生じるものも、火を通して生じるものも、何か他のものを通して生じるものもあり、さらには動物を通して生じるものもあるが（意欲に即した運動がこれにあたる）——、運命によって動物を通して生じる運動が動物次第である、と彼らは論じる。たしかにその運動は、必然的であるという点では他のものごとすべてと同様の仕方では生じるとされる⁵⁵——なぜなら当然、それら〔動物〕にも⁵⁶必然的に外的原因がそのとき臨在し、その結果それらは意欲に即した自発的な（ἐξ ἑαυτῶν）運動を必然的に何らかそうした仕方で行うことになるから——⁵⁷。しかし、その運動は意欲と同意⁵⁸を通して生じるのに対して、他のものの運動は、ある場合は重さのゆえに、ある場合は熱さのゆえに、また別の場合は何か他の原因⁵⁹に即して生じるため、前者の運動については動物次第であると彼らは論じるが⁶⁰、後者の各々の運動については、例えば石次第であると

⁵⁵ 底本に従い δὲ を μὲν (Arnim) と読む。

⁵⁶ 底本に従い τοῖς を τούτοις (Donini) と読む。

⁵⁷ 底本に従いピリオドではなくコンマとする。

⁵⁸ ストア派において人間以外の動物にも「同意」が認められていたかをめぐっては、解釈上の論争がある（認められていなかったとする Inwood 1985, 66-91 に対して、認められていたとするのは Long 1974, 172-173（日本語訳 262）、Long 1982, 50, Labarrière 1993, 244-249. cf. Sorabji 1993, 41）。動物に「同意」を認めていると考えられる資料は、この箇所（およびネメシオスの並行箇所）以外に、キケロ『ルクルス（アカデミカ第2巻）』37-39=SVF II. 115。これに対して、「同意」を理性的な存在に限定していると思われる資料は、オリゲネス『原理論』3.1.3=SVF II. 988、セネカ『倫理書簡集』113.18-19。いずれにしても、ストア派は人間の意欲や同意が理性的である点で非理性的な他の動物の場合とは大きく異なると考えていたから（注8参照）、ここでのアレクサンドロスの紹介や以下での批判がストア派の運命論に対するものとして妥当かどうかは疑わしい（シンプリキオス『アリストテレス「範疇論」註解』306.19-27=SVF II. 499、アレクサンドレイアのクレメンス『ストロマテイス』2.20, 110-111 Stählin, 487 Potter=SVF II. 714、ストバイオス『抜粋集』2.86.17-87.1 Wachsmuth=SVF III. 169、プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1037F-1038A=SVF III. 175、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』7.86=SVF III. 178 他）。

⁵⁹ 底本に従い τινὰ <αἰτίαν> (Rodier, Donini) と読む。

⁶⁰ λέγοντες を λέγουσιν (Rodier, Donini) と改変する底本の指示には従わない。

か火次第であるとはもはや論じないのである。以上が、われわれ次第のものごとについての彼らの学説の要点である。

XIV [182.20] われわれ次第のものごとについて万人が共通にもっている先取観念を、以上のように論じることで彼らが本当に確保しているかどうかは、[次の議論から] 見ることができる。あらゆるものごとが運命に即しているにもかかわらずわれわれ次第のものごとが確保されるのはどうしてか、と彼らに問いたす人は、単に「われわれ次第」という語だけではなく、その語が意味する当のものである「自主性 (τὸ αὐτεξούσιον)」⁶¹ を前提にして、そのことを問いただしている。実際、われわれ次第のものごととはこのようなものであるとみなされているからこそ、あらゆるものごとが必然的に生じると論じている人々は咎められているのである。しかし彼らは⁶²、本来は直ちにそれ [われわれ次第のものごと] は確保されないと論じた上で、その原因を探求し提示するべきであったのに、そのような立場 [われわれ次第のものごとが確保されないとする立場] はまったくもって考えがたいこと⁶³、そして、彼らの学説の多く⁶⁴ がわれわれ次第のものごとと同じ羽目に陥ってしまう [確保されなくなる] ことを見て取ったため⁶⁵、それ [われわれ次第のものごと] が運命論と齟齬しないことを示したのである。ただしそれは、われわれ次第のものごとは一切ないと論じる人々にもたらされる不合理を、語の多義性によって聞き手を欺くことで⁶⁶ 逃れようと考えてのことであった⁶⁷。

⁶¹ この語はエピクテトスも「自由」と並べて数回用いているが(『談義』4.1.56, 62, 68 他、ヒッポリュトス『全異端論駁』1.21=SVF II.975 も参照)、アレクサンドロスの頃には「われわれ次第 (のものごと) (τὸ ἐφ' ἡμῖν)」と同義の術語として用いられるようになっていた (Bobzien 1998.1, 335-336, 355 n.73) (ネメシオス『人間の自然本性について』112.7「われわれ次第のものごとについて、すなわち自主的なものごとについて (περὶ τοῦ ἐφ' ἡμῖν, ὃ ἐστὶ περὶ τοῦ αὐτεξουσίου)」)。

⁶² 底本に従い οἱ δὲ, δέον と区切って読む。

⁶³ 底本に従い ἄδοξόν τε を ἄδοξόν τι (Hackforth) と読む。

⁶⁴ 特に倫理学に関するストア派の学説を指すと考えられる (Hackforth 1946)。

⁶⁵ 底本に従い πολλά τῶν καὶ αὐτοῖς τοῦ (τῷ ES) ἐφ' ἡμῖν πᾶσαν τε ταὐτὸ δεικνὺς ἐν πόλλ' ἄν τῶν κατ' αὐτοὺς τῷ ἐφ' ἡμῖν πάσχοντα ταὐτό, <τοῦτο> ἐδείκνυσαν (Hackforth) と読む。

⁶⁶ 底本に従い τῷ (Schwartz) を付加。

[182.31] しかし、彼らが以上のように論じているのに対しては、まず次のように問いただすのが理に適っているだろう。すなわち、様々なものごとが運命によって様々なものを通して生じ⁶⁸、存在する各々のものの固有の自然本性を通して運命が活動しているにもかかわらず、彼らが「それら次第である」と述定するのは動物の場合だけであって、動物以外のものの場合には一切そうしないのはどうしてか、と。というのも、動物を通して生じるものごとが動物次第⁶⁹である理由として彼らが論じていることは、他の各々のものについても同じく論じることができるからである。実際⁷⁰、動物を通して生じるものごとは、動物が意欲すること以外の⁷¹仕方では生じえず⁷²、動物が同意し意欲することのゆえに生じ、同意なしには生じないものであるからこそ、動物次第なのだとは彼らは主張する。それ〔動物を通して生じるものごと〕は、その動物によって必然的に生じるであろうが（他の仕方では生じえないから）、その動物以外のものを通しては生じえず、また、その動物を通してはそれ以外の仕方では生じえないがゆえに、その動物次第なのだとは彼らは考えるのである。

[183.10] しかしこれと同じことは、他の各々のものについても論じることができる。実際、火を通して生じるものごとと、それ以外のものを通しては生じえず、また、火を通しては熱することを通して以外の仕方では生じえない。したがって、火を通して生じるものごとは、火が熱する以外の仕方では生じえず、また、火が熱すれば生じるが熱しなければ生じないのであるから、火次第であることになるだろう。同じことは他の各々のものについても言えるだろう。論じていることがらがもはや明白になったのだから、どうしてこれ以上長話をする必要があるだろうか。われわれは語についてとやかく

⁶⁷ 底本に従い ἡγοῦνται を ἡγοούμενοι (Hackforth) と読む。

⁶⁸ 底本に従い ἄλλως (v.c.V), ἄλλου (cett.) を ἄλλων (lat. Donini) と読む。

⁶⁹ 底本に従い ἐπὶ τῶν ζώων を ἐπὶ τῷ ζώῳ (coni. Bruns in app.) と読む。

⁷⁰ 以下、= SVF II. 980.

⁷¹ 底本に従い μὴ を ἤ (Bruns coni. in app., Arnim) と読む。

⁷² 底本に従い ἄλλως <ἄν> (Arnim) と読む。

言っているのではない。動物に対して、「それらのもの次第」という語以上の何も保持していないにもかかわらず、それらを通して生じるものごとにおいて、動物以外のものに比べてより多くを与えていると信じていること——動物以外のものを通して何らかのものごととは生じるのに——、まさにこのことが責められるべきなのである。それは、語の共通性によって⁷³彼ら自身が騙されているからか、あるいは、他の人々を騙そうと意図しているからか⁷⁴のいずれかであろう。

[183.21] これに加えて、彼らについて次の点を訝しく思う人もいるだろう⁷⁵。すなわち、彼らはいったいなぜ、われわれ次第のものごととは意欲と同意に存すると主張するのか——それゆえ彼らによると、われわれ次第のものごとがすべての動物において同様に保持されることになるのだが——という点である。実際、われわれ次第のものごととは、表象が入り込んできたときに、表象に対して自発的に (ἐξ ἑαυτῶν) 屈し、その現われたものに向かって意欲することに存するのではない。これはおそらく、「本意からのものごと (τὸ ἐκούσιον)」を確立し証示するものではあろう。しかしながら、本意からのものごととわれわれ次第のものごととは同じではない⁷⁶。なぜなら、本意から

⁷³ Hackforth 1946 は <οὐ> κοινωνίαν ないし ἀκοινωνίαν と読み、「非共通性」と解することを提案している (すなわち、ストア派が「～次第のものごと」という語を動物だけに限定したことを指していると解釈)。しかしそのような改変は不要であり、ストア派が「われわれ次第のものごと」という語の意味を他の人々と異なった仕方であてているにもかかわらず、その同じ語を言葉の上でだけ共通に用いていることを言っていると解釈すればよい (Sharples)。

⁷⁴ 底本に従い τοῦ を τὸ (Bruns coni. in app., Hackforth) と読む。

⁷⁵ 以下、= SVF II. 981.

⁷⁶ 選択および思案によるものごとと本意からのものごとの区別は、アリストテレス『ニコマコス倫理学』1111b6-10、『エウデモス倫理学』1223b38-1224a4, 1226b30-36。ただし、われわれ次第のものごとを前者のみに限定する考え方は、アリストテレスには見られない (『ニコマコス倫理学』1113b19-21 他)。本意からのものごとを選択とは異なり人間以外の動物や子どもも与えるものとしているのは、アリストテレス『ニコマコス倫理学』1111a25-26, 1111b8-9、『動物の運動について』703b3-4 (ただし、『エウデモス倫理学』1224a4-7, 1225a36-b1)。

らのものごととは強制されない同意から生じるものごとである一方、われわれ次第のものごととは理性と判断に即した同意とともに生じるものごとだからである。それゆえ、何かがわれわれ次第であればそれは本意からのものごとでもあるが、本意からのものごとがすべてわれわれ次第なのではない。非理性的な動物も、それ自身の内の意欲と同意に即して為す⁷⁷ 限りのことを、本意から為すのであるが、それ自身によって生じるものごとの一部がそのもの次第であることは、人間に特有のことなのである。というのも、人間が理性的であることとは⁷⁸、入り込んでくる表象の、そして一般に、行為すべきことと行為すべきでないこととの判断者および発見者として、理性を自分自身の内に有することだからである。それゆえ、表象のみに屈する他の動物の場合には、同意と行為に関する意欲との原因は表象に即したものであるが、人間は、行為すべきことについての外から入り込んでくる表象の判断者として理性を有しており、その理性を用いて、各々の表象が〈現われているようなものとして現われているか〉だけではなく、〈現われているようなものとして実際にあるか〉をも吟味するのである。そして、もし理性に即して探求する中で、その表象の実際のあり方が現われ方とは異なることを見出したならば、これこれのように現われているからという理由でそれを受け入れることなく、実際にはそのようなものではなかったからという理由でそれに対して抵抗するのである。実際このような仕方では、何かが快いものとして現われていてそれへの欲求をもっている⁷⁹ にもかかわらず、自らの有する理性がその現われに合致しないからという理由で、それを避けることがしばしばあるし、同様に、何かが有益なものとして現われても、[避けるのがよいと] 理性に思われた場合には、それを避けるのである。

[184.11] われわれ次第のものごとは思案を通して生じる理性的な同意に存するにもかかわらず、彼らはそれが同意と意欲に存すると言っているのだ

⁷⁷ 底本に従い τὴν ἐν αὐτοῖς <ποιεῖ> (Schwartz) と読む。

⁷⁸ 底本に従い τῷ (Lond. O Bruns) ではなく τὸ (VHa¹² Apelt) と読む。

⁷⁹ 底本に従い ὁρεξίν <έχων> (B²HES lat.; ante ὁρεξίν a¹²) と読む。

が、その同意と意欲は非理性的にも生じるものなのだから、彼らがわれわれ次第のものごとについて粗雑な捉え方しかしていないということは、彼らの論からして明らかである。というのは⁸⁰、それがいったい何であるのかも、いかなるものごとの内に生じるのかも、彼らは論じていないからである。理性的であるとは、行為の始源であることに他ならない⁸¹。すなわち、各々のものの本質 (τὸ εἶναι) はそれぞれ異なることに存するように——動物の本質は意欲するものであることに存し、火の本質は熱いものであり熱するものであることに存し、また別のものの本質は別のことに存する、というように——、人間の本質は理性的であることに存するが、理性的であることとは、何らかのことは選ぶ⁸² か否かの始源を自分自身の⁸³ 内に有していることに等しい⁸⁴。そして、この両者は同一であり、このことを否定することは人間を否定することになるのである。

[184.20] 彼らは理性をなおざりにして、われわれ次第のものごとが意欲の内にあると考えているようにみえる。というのは、もし彼らがわれわれ次第のものごとは思案することに存すると論じるならば、彼らの詭弁はこれ以上進まないだろうからである⁸⁵。意欲の場合には、動物を通して生じることは意欲なしには為されることができないという理由で、意欲に即して生じるものごとは動物次第であると論じることができる。しかし、もしわれわれ次第のものごとが思案することに存するのであれば、もはや彼らにとって、人間を通して生じることは他の仕方では生じえないということが帰結しなくな

⁸⁰ 底本に従い ὅτι を付加 (add. Bruns)。

⁸¹ アリストテレス『エウデモス倫理学』1222b15-1223a16。cf. 『ニコマコス倫理学』1111a22-24, 1112b31-32, 1113b17-19。

⁸² 底本に従い ἐχέσθαι を ἐλέσθαι (Bruns) と読む。

⁸³ 底本に従い αὐτῷ (Lond.O), τῷ (V lat. a¹²) を αὐτῷ (Bruns) と読む。

⁸⁴ 理性的能力が反対的なものの作出に関わることについては (医術の場合には健康と病氣), アリストテレス『形而上学』1046b1-9, 1048a5-15。ただし、アリストテレスにおいては、行為選択の局面との関連で論じられてはいない。

⁸⁵ ただし、ストア派が人間を他の動物と区別するものとして挙げるのは、おそらく思案ではなく理性であろう (Bobzien, 1998.1, 385 n.61, 注8参照)。

るだろう。なぜなら、人間は思案能力を有するものではあるが、人間を通して生じることのすべてが思案を通じて為されるわけではないからである。すなわち、われわれは為すことのすべてを思案したうえで為すのではなく、行為されるべき事柄についての適切なタイミングが思案するための時間を許さないときには、しばしば思案せずに為すことがあるし、また、怠惰その他の原因によってもしばしば思案せずに為すのである⁸⁶。しかし、もしわれわれが思案したうえで生じるものと、思案せずに生じるものととの両方があるのであれば、思案を通して生じるものごとは——人間を通してはそれ以外の仕方では生じるものごとは何もないとの理由から——人間次第であると論じる余地はもはやなくなるのである。

[185.2] したがって、われわれが為すことには、思案したうえで為すことと思案せずに為すことの両方があるのであれば、われわれを通して生じるものごとは、動物や火や重い二物体〔水と土〕を通して生じるものごとと同じように、端的に生じるのではない。もしわれわれが思案したうえで何かを為す力能をも自然本性から与えられているのであれば、われわれが思案を通して〔実際にする行為とは〕別の行為をすることもできる——思案せずとも⁸⁷〔行為しただろうこと〕を絶対的に行為するわけではなく——という力能を有していることは明らかである。さもないと、われわれが思案することは無駄になってしまうだろうからである⁸⁸。

XV [185.7] 「人が同じ状況下にありながらその時々で異なる活動をするならば、無原因の運動（ἀναίτιος κίνησις）が導入されることになる」⁸⁹という議論に乗り⁹⁰、それを理由として、〔実際に〕行為するだろうことと対立することとは行為しえないと論じるのは、これもまた前述の議論と同様の錯誤なので

⁸⁶ アリストテレス『ニコマコス倫理学』1111b9-10, 1117a17-22, 1142b2-5。

⁸⁷ 底本に従い <μη> βουλευσάμενοι (Schwartz, Apelt) と読む。

⁸⁸ 底本に従い <μάτ> ην <γάρ> ἄν (Schwartz) と読む。

⁸⁹ プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1045b-c=SVF II.973, キケロ『運命について』20=SVF II.952。

⁹⁰ 底本に従い ἐποχουμένων を ἐποχουμένους (Bruns) と読む。

はなかるうか⁹¹。というのも、原因に即して生じるものごとは、それが生じる原因をいつも絶対的に外部にもっているわけではないからである。実際、われわれ次第のものごとがあるのは、次のような力能のゆえ——すなわち、このような仕方では生じるものごとを左右しているのはわれわれであって、何らかの外的な原因ではないから——なのである。それゆえ、このような仕方では生じるものごとは、われわれに由来する原因を有しているのであって、無原因に生じるのではない⁹²。というのも、人間は、自分自身を通して生じる行為の始源であり原因であって、このような仕方では行為することの始源を自分自身の内に有しているというまさにこのことが、ちょうど斜面を転がって移動することが球の「本質である」⁹³のと同じように、人間の本質（τὸ εἶναι）だからである⁹⁴。それゆえ、他のものは各々その外的状況をなす原因に従うが、人間はそうではない。なぜなら、人間の本質は、その人の外的状況に絶対的に従うわけではないような仕方⁹⁵、自らの内に始源と原因を有していることに存するからである。

[185.21] また、もし仮に⁹⁶ 行為すべきことについてのわれわれの判断が一つの目標に向かって生じるものだとするれば、同じものごとに関して常に似

⁹¹ = SVF II. 982.

⁹² 底本に従い <οὐκ> ἀνατίως (Schulthess O) と読む。

⁹³ Bruns は脱落を推測しているが、底本に従って τὸ εἶναι を意味上補いうると解する (Rodier, Valgiglio)。ただし Natali が指摘するように、「斜面を転がって移動すること」を球の「本質」と呼ぶのは、いささか奇妙ではある。Hackforth 1946 は、ὡς οὐκ ἔχει ἐν αὐτῇ> ἡ σφαῖρα τοῦ κατὰ τοῦ πρανοῦς κυλιομένη φέρεσθαι 「球は斜面を転がって移動すること〈の始源を自らの内に有していない〉ように」とする改変を提案している。

⁹⁴ Sharples が注釈で指摘しているように (Sharples 1991, 177 にも同様の指摘)、ここでのアレクサンドロスの議論は、キケロ『運命について』23-25 で紹介されるカルネアデスの議論と酷似している。ただし、Sharples が注意を促しているように、キケロの紹介によるとカルネアデスは「心の意志的運動」の原因をその運動自体の自然本性だとしている点で、アレクサンドロスとは微妙に異なる（ただし、キケロの紹介が正確ではない可能性については、近藤 2006, 204）。

⁹⁵ 底本に従い <ὥς> μὴ (Bruns lat. Donini) と読む。

⁹⁶ 底本に従い εἰ (add. Bruns) を付加。

た判断が生じるとしてもある程度理に適っているかもしれない⁹⁷。しかし、実際はそうではないのである（すなわち、われわれは選ぶ対象を、立派さのゆえに選ぶときも、快さのゆえに選ぶときも、有益さのゆえに選ぶときもあり、これらのそれぞれを作出するものは同じではない）⁹⁸。したがって、われわれにとっては、今は立派さへと引き寄せられて状況の中からこれこれのものごとを選好するが⁹⁹、他の場合には快さや有益さに判断を帰着させて他のものごとを選好する、といったこともありうるのである。

[185.28] 土がそれ自体の内にある重さに即して下方に移動することの原因や、動物が意欲に即して行為することの原因については、われわれは他の原因を求めることはない。なぜならその各々のものが、自然本性的にそれぞレのようなものであることにより、生じるものごとに対して自発的に (ἐξ αὐτοῦ) その原因を提供するからである。これに対して、われわれ[人間]によって生じるものごとの場合には、同じ¹⁰⁰ 状況下でもその時々で相異なる仕方でするが、そうしたものごとについてもやはり同じように人間自身以外の原因を追ひ求めるべきではない。というのも、まさにそのこと、すなわち、自分自身を通して生じる行為の始源であり原因であるということが、人間の本質だからである。

[186.3] 思案した者も現われ (φαινόμενον) に同意するのであり、それゆえ他の動物と同様に表象に¹⁰¹ 従っているのだ、と論じるのはただしくない¹⁰²。

⁹⁷ 底本に従い αὐ (add. Bruns) を付加。

⁹⁸ アリストテレス『ニコマコス倫理学』1104b30-35。ただし Donini 1987.2 (2011), 149-154 が指摘するように、アリストテレスの場合にはこれら三つの価値基準に基づく判断の調和を達成しているのが有徳な人と考えられていたから (Burnyeat 1980, 86-88 参照)、アレクサンドロスが説いている行為選択の可能性は有徳な人には開かれていないものになるという奇妙な帰結を伴う。

⁹⁹ 底本に従い προκείμενα を προκρίνειν (Hackforth) と読む。

¹⁰⁰ 底本に従い ἄλλοις を αὐτοῖς (fort. Bruns in app.) と読む。ただし, ἄλλοις のまま読み「相異なる状況下でその時々で相異なる仕方でする」と解することも可能か。

¹⁰¹ 底本に従い τὴν φαντασίαν を τῇ φαντασίᾳ (Schwartz) と読む。

¹⁰² = SVF II. 983。

というのは、現われのすべてが表象であるわけではないからである。すなわち表象は、感覚の活動と似た仕方で、外から入り込んでくるものによって理性ぬきの単純なものとして生じ、それゆえ非理性的な動物において最も力を発揮するが、現われのなかには理性を通して推論からそのように現われる原因を得ているものもあって、それはもはや表象とは言われないのである。というのも、自分自身の思案のなかで生じる推論のゆえに何かに同意した者は、自分自身がその同意の原因だからである。

【運命論に対する批判Ⅲ：運命論の倫理的帰結】

XVI [186.13] あらゆるものごとが運命に即して生じる¹⁰³と論じる者が、われわれ次第のものごとを確保していないことも（われわれが探求しているものは、彼らの主張では確保されているとしても、実際には確保されていないのであり¹⁰⁴、むしろ彼らは、そのような事柄が存在することはそもそも可能ではないことの原因を説明しようと試みているようなものだから）、また、そのような能力が否定される原因についての彼らの説明が真ではないことも（何ら理に適ったところがないのだから）、上述のことから明白である。さらには、このようにわれわれ次第のものごとの存在を否定する者には、彼ら次第である限りで、人間の生を混乱させ転倒させるということが帰結するのである。

[186.20] もし、事実はこのようであるにもかかわらず（実際、他の人は言うまでもなく、彼らの中の誰かであっても、そのことを行為することも行為しないこともできる能力を有しているとその人が〔実際には〕自らみなしつづ行為することを、行為しないように説き伏せることはできない¹⁰⁵。真理は、それほどまでに大きな力と、実際に生じるものごとによって由来する明証的な証拠

¹⁰³ 底本に従い γίνεσθαι (add. O) を付加。

¹⁰⁴ 続く οἱ γε 以下とのつながりを考えると、Zierl のように σώζεται を σώζουσιν と改変する方がよいか。

¹⁰⁵ 底本に従い μὴ πράττειν, ἂ πράττουσιν ὡς ἔχοντες (Bruns: ἔχοντας libri) と読む。

を有しているのである¹⁰⁶）——もし、こうした事実にもかかわらず、彼らの学説が万人が信じるほどの力をもつに至ったならば——すなわち、われわれは何ごともし左右することはなく、常に状況に対して屈服し同意してそれに従い、われわれが行為するのはそのことを絶対的に行為するはずであるからであり（このような状況下でそれ以外のことを為すことはわれわれには不可能だから）、また同様に、われわれが行為しないのもこのような状況を乗り越えることはできないためである、という学説であるが¹⁰⁷——、その場合には次のような帰結がどうしても生じてしまうのではなかろうか。すなわち、万人がそのような信念のゆえに、何らかの苦勞や気づかいと共に（μετά）生じるものごとについてはそれを捨て去り、安逸に得られる快樂を選ぶことになる——生じるはずのものごとは、それについて自分自分が何ら立派なものごとを為さなくても、絶対的に生じるだろうと考えて¹⁰⁸——という帰結である¹⁰⁹。人々がこのような状態となり、行為されるものごとがその人々の選びに従うのであれば（なぜなら事実そのものは、それに関する間違った信念によって実際と¹¹⁰異なるあり方になるわけではないから）、万人が立派なものごとを軽視するようになり（そのようなものごとの獲得と所有はすべて苦勞と共にもたらされるから）、悪しきものごとの方を（安逸な快樂と共に生じるがゆえに）選ぶことになる、という結果に陥るのではなかろうか。

[187.8] この人々〔運命論を信じて怠惰な生を選ぶ人々〕に対して¹¹¹、彼

¹⁰⁶ アリストテレス『自然学』188b29-30, 『動物部分論』642a19, 『形而上学』984b9-10。

¹⁰⁷ クリュシッポスによる「円柱の類比」の議論（注18参照）や、13章で紹介されていたピロパトルによると推測される議論を考えると（注43参照）、運命論によると行為が外的状況だけによって決定されることになってしまうかのように論じているこのような批判は不当であろう。

¹⁰⁸ 底本に従い ὥς の後にコンマは置かず、<κᾶν> (B²) μηδὲν αὐτοὶ περὶ αὐτῶν <ποι> ὥσιν (Amand) καλόν と読む。

¹⁰⁹ このような議論も、クリュシッポスによる「怠惰な議論」の論駁からすると、ストア派の運命論に対する批判としては不当であろう（注19参照）。

¹¹⁰ 底本に従い ἡ (add. a²) を読む。

¹¹¹ 底本に従い προσουτισινό (V) を πρὸς οὓς τίς ἂν ὁ (Bruns) と読む。

ら「運命論を説く哲学者」はいかなる議論ができるだろうか——彼らの学説に説得されて、この人々はこのような帰結に至ったというのに。もし彼らがこの人々を責めるのであれば、この人々は彼らに対して、このような状況下では他の行為をすることは自分たちにはできなかったのだと、正当に言い返すことができるだろう。このような学説を教えた当の者たちがこの人々を咎めることが、どうして理に適っていると言えようか。むしろ彼らに従えば、非難や懲罰や勧奨や褒賞その他のものは、いずれも固有の自然本性を確保することはなく、これらもそれぞれ、その対象となる事柄と同様に、必然的な仕方では生じることになるだろう¹¹²。

[187.16] 実際、どうしてこれでもなお、プリアモスの息子アレクサンドロスに、ヘレネー誘拐の過ちを犯した責任があると言えようか¹¹³。どうしてアガメムノンが、「自分でも否定しない」¹¹⁴と言って自分自身を非難したことが正当だと言えようか。もしアレクサンドロスがそのとき彼を誘拐へといざなった状況が無視できる力能を有していたならば、あるいは、もしメネラオスが怒りをかきたてた事情を「無視できる力能を有していたならば」¹¹⁵、あるいは、もしアガメムノンが自ら過ちを犯したと¹¹⁶ みなして自分自身を責めた

¹¹² アリストテレス『ニコマコス倫理学』1109b30-1110a1, 1113b14-1114a3。非難など自体が必然的に生じると論じることの自己矛盾を指摘する同様の議論は、エピクロス『ヴァティカン写本教説』40、『自然について』第25巻 Laursen 1997, 35-37=Long & Sedley 20C2-7に見られる。ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』7.23=SVF I. 298は、キティオンのゼノンの逸話（おそらく後世の捏造であろう）として、運命論の下でも懲罰自体が運命づけられているという論拠で懲罰を正当化する議論を紹介しているが、これをストア派本来の議論として受け取るべきではないだろう（Bobzien 1998.1, 193）。称賛や非難、賞罰を正当化するより哲学的な議論は、クリュシッポスの「円柱の類比」に求めるべきである（キケロ『運命について』40=SVF II. 974, ゲッリウス『アッティカの夜』7.2.13=SVF II. 1000）。

¹¹³ 底本に従い *ἀν* (add. B) を読む。

¹¹⁴ ホメロス『イリアス』9.116。こうしたホメロスの使用はストア派に由来するか。

¹¹⁵ 底本は「あるいは、もしメネラオスが怒りをかきたてた事情を「無視できる力能を有していたならば」」の部分で、文脈に合わないとの理由で削除している（Bruns）。

¹¹⁶ 底本に従い *ἀναμάρτητος* (V¹ lat.) を *ἀν ἀμαρτήσας* (Bruns) と読む。

事柄について〔力能を有していた〕ならば、彼らに責任があると言っても理に適っていたことだろう。しかし、咎められる理由となったそれぞれの行いが各々の者について予言されたとして、それが以前から、そのずっと前から、そもそも彼らの中の誰もが生まれる前から真であったのならば¹¹⁷、どうして彼らにその生じたものごとの責任があると言えようか。また、徳と悪徳もまたわれわれ次第であることを、もはやいかにして説明できようか。もしわれわれがこのようなあり方をしているために〔そうになっている〕ならば¹¹⁸、称賛を受ける者と非難を受ける者とがいるということがどうして理に適っていると言えようか。この学説がもたらすのは、悪人に対する弁護のたねでしかない。少なくともわれわれが目にするところでは、善い立派な行為を運命や必然に帰す者は誰もいないが、悪人たちはそれ〔運命や必然〕のゆえにこのような悪人になっているのだと語るのである。悪人たちがそれと同じことを哲学者も言っていると信じるならば、そうした悪行に彼ら自身も自由に向かい、他の人々にもそれを勧めるといったことを、おおっぴらにするようになるに違いないのではあるまいか。

XVII [188.1] また、このように論じながら、死すべきものに対する神々による摂理を確保することがどうしてできようか¹¹⁹。一部の人々に対して生じると言われる神々の顕現が、何らかの先行する原因に即して生じるのであ

¹¹⁷ クリュシッポスはト占による予言の存在から運命論を証明したとされる。エウセビオス『福音の準備』4.3.1-2=ディオゲニアノス断片 4 Gercke=SVF II. 939, キケロ『運命について』11=SVF II. 954。他に、偽プルタルコス『運命について』574e=SVF II. 912, キケロ『ト占について』1.127=SVF II. 944。

¹¹⁸ 底本に従い *εἰ γὰρ οὕτως ἐστι δι' ἡμῶν* (V a¹ Lond. Rodier) を *εἰ γὰρ οὕτως ἐχόντων ἡμῶν* (conl. Amand) と読む。Zierl は *εἰ γὰρ οὕτως ἐστι δι' ἡμῶν* 「もし〔徳と悪徳が〕このような仕方であれわれを通したものであるのならば」とする読みを提案している。

¹¹⁹ ストア派では一般に運命と摂理は同一のものとされた（ストバイオス『抜粋集』1.78.18-20 Wachsmuth=アエティオス 1.27.5 Diels=SVF I. 176, プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1035b=SVF II. 30, ただしカルキディオス『ティマイオス註解』144）。ストア派において摂理が特に人間に対する配慮を伴うとされていることについては、プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1051d-e=SVF II. 1115, 『共通観念について』1075e=SVF II. 1126, キケロ『神々の本性について』2.133-167。

れば（その人々の誰もが生まれる前から、神々からの配慮を受ける者もいれば受けない者もいる、ということが真であるような仕方で）、どうしてこれをなお摂理と言うことが正当だろうか——その配慮は、功績に応じて (κατ' ἀξίαν) 生じるのではなく、何らかの先行する必然に即して生じるというのに。また、敬虔であると思われる人々による神々に対する敬虔も、どうして確保されようか——そのことを為さないことが彼ら次第ではないがゆえに、そうしているのだとしたら。神々から他の人々よりも多くを授かる者に対してそうしたことが生じるのも、そうしたことの始源が彼らが存在する以前から先行してあるためだということになるだろう。

[188.11] また、ト占術も否定せずにどうしていられようか。ト占術の有益性が否定されてしまうからである¹²⁰。実際、いったい何を占師から学んだり¹²¹、学ぶことによって防いだりしうるといえるのか——もし、われわれが学ぶことができ、占師が示すことができる唯一のものごとが、われわれがそれを学ぶことも¹²²、その各々のことを為すか為さないかも、われわれが生まれる前から必然的となっていたようなものごとだけであり、また、われわれによって生じるだろうものごとの原因は先行してあるため、神々によって予言されたことにとどまることがわれわれには左右できないのだとしたら。

XVIII [188.17] この学説が人間の生全体を転倒させる原因であることは誰にでも容易に分かることであり、その支持者自身ですら自分の議論を〔実際には〕信じることができていないということが、それが誤りでもあることを十分に証明している。なぜなら彼らは、実際に議論している際はいつも、こうしたたぐいの学説を他人から一度も聞いたことがないかのように、自由

¹²⁰ 運命論に従うとト占がむしろ無益なものとなるという同様の議論は、エウセビオス『福音の準備』4.3.6-13=ディオゲニアノス断片 4 Gercke=SVF II.939（おそらくエピクロス派）、キケロ『ト占について』2.20-25、『神々の本性について』3.14（アカデメイア派）など、広く見られる。なお、本作品にト占術に対する批判が欠けている点については、『日本語訳・注（I）』注2を参照。

¹²¹ 底本に従い μαθεῖν を μάθοι (Schwartz) と読む。

¹²² 底本に従い τοῦ を τὸ (Bruns in app., Donini) と読む。

（ἐλεύθερον）や自主性を守り通しているからである。すなわち、彼らが人々に何かを勧めようと試みるのは、彼ら自身がそのことを為すことも為さないこともできる力能を有しているとみなしてのことであり、また、勧める相手が彼らの言葉によって、彼らが黙っていたならば行為していただろうことと¹²³ 反対のことを選ぶことができるとみなしてのことである。他方、彼らが人々を非難したり咎めたりするのは、その人々が相応しいことを行為していないとみなしてのことである。さらに、彼らは多くの¹²⁴ 書き物を、若者たちを教育する手段になると考えて書き残しているが、彼らがそうしたのは、彼らの状況がそのようであったがゆえに書かないこと¹²⁵ が妨げられたからではなく、書くか書かないかは彼ら次第であるが人間愛のために書くことを選んだからなのである。

XIX [189.9] 〈もし彼らが万人に賛同されていることに注意を向けたならば〉¹²⁶、議論で他を凌ごうとする虚栄心を捨て去り、われわれ次第のものごととは自由で自主的なものであって、〈同じ〉状況下でも相対立するものごとのどちらを選んで行為するかを左右できることだと認めたことであろう¹²⁷。〈というの〉も、素人であっても立法者であっても同様に正当であると認めている〈法が〉、人間たちにとって〈存在するからである〉。すなわち、不本意にそのような行為をした者は赦されるのが相応しい、とするものである¹²⁸。なぜなら罰は、生じた事柄に応じてではなく、行為がなされた仕方に応じて規定されるからである。この点に関しては、他の人々だけでなく彼ら自身も、これをただしくないとみなして責めるなどということはしていないのであ

¹²³ 底本に従い、ὄν (add. Cas.Lond.O) を付加し、τῶν を αὐτῶν (O) と読む。

¹²⁴ 底本に従い写本通り πλείω (直訳すれば「より多くの」) と読んだが、あるいは πλείστα (Bruns in app.) 「非常に多くの」と改変すべきか。

¹²⁵ 底本に従い <μη> συγγράφειν (Bruns, conl. in app.) と読む。

¹²⁶ 底本とともに Hackforth による補いに従い、πράξως ἐπὶ περιεστώσιν <τοῖς αὐτοῖς, εἰ τοῖς παρὰ πάντων ὁμολογημένοις προσέσχον. ἔστι γὰρ νόμος> ἀνθρώποις と読む (訳文中の〈 〉内)。

¹²⁷ 底本に従い συγχωρησάντων を συνεχώρησαν τῷ (Bruns conl. in app.) と読む。

¹²⁸ アリストテレス『ニコマコス倫理学』1109b32 他。

る。しかし、行為されていることについての¹²⁹ 無知のゆえに過ちを犯したり、強制によって過ちを犯したりする者たちに劣らず¹³⁰、自分が何を行為しているかを知っているが、絶対的かつ必然的に生じるべき状況の下で実際にする行為以外の行為をする¹³¹ 力能を自分自分の内に有していないような者たちも¹³²、赦しを受けるに相応しいということになるのではなかろうか。なぜなら[彼らの説によると]、彼らの自然本性はこのようなものであり、彼らの固有の自然本性に即したものと、運命に即して個々の行為をおこなうことだからである——例えば、重いものにとっては、高所から手放されたならば下方に移動することが、滑らかなものにとっては、手放されたならばそれ自体で斜面に沿って動くことが、そうであるように。実際こうしたこと[運命に即して行為した人々を罰すること]は¹³³、馬を人間ではないという理由で罰するのが相応しいとみなしたり、他の動物の各々をこうした[人間以外の動物として生まれたという]劣った偶運に遭ったという理由で罰するのが相応しいとみなしたりするのと同じようなことなのである。しかし、パリス¹³⁴のような人物であっても、このような仕方では生じるものごとに基づいて、為した者を罰するほどに残酷で無思慮ではないだろう。では、罰が理に適っているのは、どのようなものごとに基づいてなされる場合だろうか。それは、その人自身の悪しき選りから生じたものごとに基づいて以外ではないだろう。実際、自ら選ぶ力能を有しながら、立派さと法とを自らの行為の目

¹²⁹ 底本に従い δι' ἄγνοιαν <τῶν> πραττομένων (coni. Casp.O) と読む。Bruns, Zierl は πραττομένων を削除している。

¹³⁰ アリストテレス『ニコマコス倫理学』では「不本意なものごと (ἀκούσιον)」が強制と無知の二点から規定されている (1109b35-1110a1, 1111a2)。

¹³¹ 底本に従い πράττειν (add. y Bruns) を付加。

¹³² 底本に従い οἱ (add. Bruns) を付加。

¹³³ 底本に従い τὸ τοῦ τοῦτο (lat. Donini) と読む。

¹³⁴ シケリア島の都市アクラガスの伝説的な僧主 (前 570 年頃 - 549 年頃)。真鍮製の牡牛に敵を入れて焼き殺したと伝えられるなど、古代において残酷さの代名詞として知られていた (ピンダロス『ピュティア祝勝歌集』1.185-7, アリストテレス『ニコマコス倫理学』1148b24, キケロ『トゥスクルム荘対談集』2.17-18, 5.75, 87 他)。

標とすることを放棄し、利得や快樂のためにそれらを見做して愚かなことを為す場合には、その人は罰を受けるに相応しいと万人が考えるのであり、逆に、このような仕方では過ちを犯したわけではない場合には、赦しを与えるのである。

[190.5] 今やすべての悪人たちが、この驚くべき学説を哲学者から学んだ上で、その教師たちに次のことを教える時がきた¹³⁵。すなわち、不本意に過ちを犯す者たちに劣らず、自分たちもまた赦しを受けるに相応しいのだと¹³⁶。なぜなら彼らは、もしかしたら自分で防ぐこともできたかもしれないような¹³⁷ 何らかの外的強制 (καταναγκάζοντος) によってではなく、彼ら自身の内の自然本性によって行いを為すのであり、その自然本性から解放されては何ごともしえなないのだから¹³⁸。もしそうであれば、その犯された過ち自体に対して、いったい誰が責任を負いうるだろうか。しかし、この学説の唱道者であれ他の誰であれ、自らの過ちの原因をこのように説明する者は嘘を¹³⁹ 言っているとみなし、そうした者たちに赦しを与えることはないのであれば、彼らも他のすべての者も同様に次のことを信じているのは明らかである。すなわち、われわれ次第のものごととは、彼らがこの問題に取り組んで論じる際に捏造しているようなものではなく、彼ら自身を含めたあらゆる人が実際の活動を通して証言しているような¹⁴⁰ ものごとである、と。というのは、仮

¹³⁵ 底本に従い ὅρα を ὅρα (lat. E Cas. Casp.O Donini) と読む。

¹³⁶ 底本に従い ἄξιοι (lat. a²; add. post ἀμαρτανόντων B²) を読む。

¹³⁷ 底本に従い ὄν を οἶον (Hackforth) と読む。

¹³⁸ Zago 2012, 378-382 に従い, ἄλλ' ὑπὸ τῆς φύσεως τῆς ἐν αὐτοῖς, <ἧς> οὐδὲν οἶόν τ' ἐστὶν λυθέντας [Hackforth: λαθόντας codd.] ποιῆσαι· καὶ τίς οὖν [οὐκ V] ἂν αὐτοῖς τοῖς ἀμαρτανόμενοις αἰτίος [a²Lond.O.: αἰτίος Va¹] <εἴη> [Thillet] と読む。底本は Hackforth の提案に従い, ἄλλ' ἀπὸ τῆς φύσεως τῆς ἐν αὐτοῖς οὐδὲν οἶόν τ' ἐστὶν λυθέντας ποιῆσαι, καὶ αἰτίας οὐδὲν οὐδ' ἐν αὐτοῖς τοῖς ἀμαρτανόμενοις ἄξιον と読み, 「彼ら自身の内の自然本性から解放されては何ごともしえなないのであって、まさにその犯された過ち自体においてすら責任を帰されるに相応しい要素は何もないのである」と解している。

¹³⁹ 底本に従い καὶ ψευδεῖ (del. Bruns) を削除。

¹⁴⁰ 底本に従い δεῖ (del. Bruns) を削除。

に彼らが本当にそのように信じているのであれば、過ちを犯したすべての者たちを、そのすべての行為をしないでいる力能は有していない者とみなし、赦すだろうからである。

XX [190.19] しかし、われわれ次第と呼びうるものごとがあること、そして、その力能のゆえに生じるものごとは無原因に生じるわけではないこと（なぜなら人間が、自分自身によって生じるものごとの始源であるかぎりで、このような仕方では生じるものごと [自らの行為] の原因であるから）、このことは上述のことが十分に示している。そして、これに対する反対論を試みている人々 [運命論者] ですら、もしたとえわずかでも自ら論じている事柄について自分が真実を言っているとみなして——すなわち、その時点でその行為をしないこともできる力能を有しているような仕方では、誰かによって生じるものごとは何一つないと信じて——自分のすべての行為を行うことに踏みとどまるならば、そのことを十分に納得するだろう。なぜなら、本当にこのことを信じているならば¹⁴¹、誰かを非難することも、誰かを称賛することも、誰かに助言することも、誰かに勧めることも、神々に祈ることも¹⁴²、何らかのことに神々に感謝することも、あるいはそれ以外の、実際に為す各々のことを為さない¹⁴³ こともできる力能を自分は有していると¹⁴⁴ 信じている者たちによっては理に適って生じるはずのことを、為すことができなくなるだろうからである。しかしながら、こうしたことなしには、人間の生¹⁴⁵ はもはや生きられないものとなり、そもそもはや人間の生ではないことになるだろう。

XXI [191.2] また、次の点も吟味せずに放っておかないでおう。い

¹⁴¹ 底本に従い *πεπιστευμένῳ* を *πεπιστευκότι* (Schwartz) と読む。

¹⁴² ただし、ストア派における「祈願」は、神々に何かを為すように通常の意味で求めることではなかったと考えられる（セネカ『自然探求』2.35、クレアンテスの讃歌 SVF I. 537, I. 527, Algra 2003, 174–177 参照）。

¹⁴³ 底本に従い *τοῦ <μὴ> ποιεῖν* (Long) と読む。

¹⁴⁴ 底本に従い *ἐξουσίαν <εἶχειν>* (Long) と読む。

¹⁴⁵ 底本に従い *βίος* (a²) を付加。

ま試みに、われわれ次第のものごとがあるということが——実際そのようにわれわれもみなしており、事物の自然本性もそう証言しているのだが——、あらゆるものごとが必然的に運命に即して生じるということに比べて、よりいっそう真であるということではなく（μηδὲν μᾶλλον ἀληθῆς），その¹⁴⁶双方が信憑性ないし不明瞭性のうで同等（ἐπ' ἰσῆς）だと仮定するとしよう¹⁴⁷。この場合、どちらの学説に従う方が人間にとってより安全で危険が少ないだろうか、そして、どのような誤りの方がより選ばれるべきだろうか¹⁴⁸。すなわち、あらゆるものごとが運命に即して生じるのに¹⁴⁹，そうは考えずに、われわれもまた何がしかを行為するか行為しないかを左右できると考えてしまうことの方であろうか。それとも、先に述べたようにわれわれ次第のものごとがあるにもかかわらず、それは誤りであると信じて、[実際には]われわれの力能に即してわれわれによって為される行為ですら¹⁵⁰，そのすべてが必然的な仕方

で生じると信じてしまうことの方であろうか。
[191.12] いやむしろ、次のことは明白ではなかろうか。もし仮にあらゆるものごとが運命に即して生じるにもかかわらず、何らかの行為をすることもしないこともできる力能を有していると自ら信じてしまうとしても、そのような人々が行為するにあたってこの信念のせいで過ちを犯すことはないだろう。なぜなら、そもそも彼らは自分によって生じるものごとを何ら左右できないのであり、したがってその点での誤りによってもたらされる危険は言葉の上にしか及ばないだろうからである。これに対して、もし実際にわれわれ次第のものごとがあり、あらゆるものごとが必然的に生じるわけではない

¹⁴⁶ 底本に従い αὐτόν を αὐτῶν (Bruns coni. in app.) と読む。

¹⁴⁷ 「よりいっそう～ない (οὐ / μὴ μᾶλλον)」 「同等 (ἐπ' ἰσῆς)」 は、懷疑論において、対立する言論の間に信憑性や明瞭性の点で差がないことを表す際にしばしば用いられる術語 (セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』1.188-191 他)。懷疑論との関係については「日本語訳・注 (Ⅰ)」注 24 参照。

¹⁴⁸ この議論については、パスカル『パンセ』L418/B233 で論じられる有名な「パスカルの賭け」との類似が指摘されている (Weidemann 1999, Bonelli 2005)。

¹⁴⁹ 底本に従い ἦ (del. B²) を削除。

¹⁵⁰ 底本の Notes on the Text の解釈に従う。

にもかかわらず、われわれが左右できるものごとは何もないと信じてしまう¹⁵¹ ならば、本来われわれによって然るべく行為されたであろうこと——そのことについて思案したことによって、または、その行為に関わる苦労を熱心に引き受けることによって¹⁵²——の多くを放棄してしまうことになるだろう。というのは、行為されるべきことについてわれわれが何ら尽力しなくても、生じるはずのことは生じるだろう¹⁵³ と信じてしまうため、自分自身を通して何かを為すということに対してより怠惰になるだろうからである¹⁵⁴。こういうわけであるから、哲学者の選ぶべきが、より危険の少ない道を自らも選び、他の人々をもその道に導くことの方であるのは明らかであろう。

【文献】

底本

[Sharples] Sharples, R. W., *Alexander of Aphrodisias: On Fate* (London, Duckworth, 1983).

他の校訂版・翻訳・注釈

[Bruns] Bruns, I., *Supplementum Aristotelicum* II.2 (Berlin, Reimer, 1892).

[lat.] Thillet, P., *Alexandre d'Aphrodise: De fato ad imperatores*: Version de Guillaume de Moerbeke (Paris, Vrin, 1963).

[Magris] Magris, A., *Alessandro di Afrodizia: Sul destino* (Firenze, Ponte alle Grazie, 1995).

[Natali] Natali, C. & Tetamo, E., *Alessandro d'Afrodizia: Il destino*, Seconda edizione riveduta (Sankt Augustin, Academia Verlag, 2009).

[Thillet] Thillet, P., *Alexandre d'Aphrodise: Traité du destin* (Paris, Les Belles Lettres, 1984).

[Zierl] Zierl, A., *Alexander von Aphrodisias: Über das Schicksal* (Berlin, Akademie Verlag, 1995).

¹⁵¹ 底本に従い $\pi\epsilon\iota\theta\epsilon\sigma\theta\alpha\iota <\mu\acute{\epsilon}\lambda\lambda\omicron> \mu\epsilon\nu$ (Hackforth) と読む。

¹⁵² 底本に従い $\delta\iota\alpha\ \tau\omicron\upsilon$ を $\delta\iota\alpha\ \tau\omicron$ (lat. (?) Cas.Lond.O) と読む。

¹⁵³ 底本に従い $\alpha\nu$ (add. Schwartz) を読む。

¹⁵⁴ クリュシッポスによる「怠惰な議論」の論駁を念頭に置いた上で、敢えて批判しているか（注 19 参照）。

略号

- [SVF] Arnim, H. von, *Stoicorum Veterum Fragmenta*, 3 vols. (Leipzig, Teubner, 1903-1905).
[Long & Sedley] Long, A. A. & Sedley, D. N., *The Hellenistic Philosophers*, 2 vols. (Cambridge, Cambridge University Press, 1987).

研究文献（注で参照したもののみ）

- [Algra 2003] 'Stoic theology', in B. Inwood (ed.), *The Cambridge Companion to the Stoics* (Cambridge, Cambridge University Press, 2003), 153-178.
[Bobzien 1998.1] Bobzien, S., *Determinism and Freedom in Stoic Philosophy* (Oxford, Oxford University Press, 1998).
[Bobzien 1998.2] Bobzien, S., 'The inadvertent conception and late birth of the free-will problem', *Phronesis* 43 (1998), 133-175.
[Bonelli 2005] Bonelli, M., 'Le pari d'Alexandre d'Aphrodise', *Kairos* 25 (2005), 183-197.
[Broadie 2001] Broadie, S., 'From necessity to fate: a fallacy?', *Journal of Ethics* 5 (2001), 21-37; rpt. 'From necessity to fate: An inevitable step?' in S. Broadie, *Aristotle and Beyond: Essays on Metaphysics and Ethics* (Cambridge, Cambridge University Press, 2007), 33-49.
[Burnyeat 1980] Burnyeat, M. F., 'Aristotle on learning to be good', in A. Oskenberg Rorty (ed.), *Essays on Aristotle's Ethics* (Berkeley/Los Angeles, University of California Press, 1980), 69-92. (M・F・バーニエト／神崎繁訳「アリストテレスと善き人への学び」井上忠・山本巍編訳『ギリシア哲学の最前線Ⅱ』東京大学出版会, 1986, 86-132)
[Donini 1987.1] Donini, P. L., 'Aristotelismo e indeterminismo in Alessandro di Afrodisia', in J. Wiesner (hrsg.), *Aristoteles: Werk und Wirkung, Paul Moraux gewidmet* (Berlin/New York, De Gruyter, 1987), II, 72-89.
[Donini 1987.2 (2011)] Donini, P. L., 'Il 'De fato' di Alessandro: questioni di coerenza', *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt* II 36.2 (1987), 1244-1259; English translation 'Alexander's *On Fate*: questions on coherence', in P. L. Donini, *Aristotle and Determinism* (Leuven, Éditions Peeters, 2010), 159-176; rpt. 'Alexander's *De fato*. Problems of coherence' in P. L. Donini, *Commentary and Tradition: Aristotelianism, Platonism, and Post-Hellenistic Philosophy*, M. Bonazzi (ed.) (Berlin/New York, De Gruyter, 2011), 139-154. (ページ数は2011年出版の論文集による)
[Frede 2011] Frede, M., *A Free Will: Origin of the Notion in Ancient Thought*, edited by A. A. Long (Berkeley/Los Angeles, University of California Press, 2011).
[Hackforth 1946] Hackforth, R., 'Notes on some passages of Alexander Aphrodisiensis *De fato*', *Classical Quarterly* 40 (1946), 37-44.

- [Inwood 1985] Inwood, B., *Ethics and Human Action in Early Stoicism* (Oxford, Oxford University Press, 1985).
- [Labarrière 1993] Labarrière, J.-L. 'De la 'nature phantastique' des animaux chez les Stoïciens', in J. Brunschwig & M. Nussbaum (eds.), *Passions & Perceptions* (Cambridge, Cambridge University Press, 1993), 225-249.
- [Laursen 1997] Laursen, S., 'The later parts of Epicurus, *On nature*, 25th book', *Cronache Ercolanesi* 27 (1997), 5-82.
- [Long 1974] Long, A. A., *Hellenistic Philosophy* (London, Duckworth, 1974). [A・A・ロング／金山弥平（訳）『ヘレニズム哲学』京都大学学術出版会，2003]
- [Long 1982] Long, A. A., 'Soul and body in Stoicism', *Phronesis* 27 (1982), 34-57; rpt. in A. A. Long, *Stoic Studies* (Berkeley/Los Angeles, University of California Press, 1996), 224-249.
- [Meyer 1998] Meyer, S. S., 'Moral responsibility: Aristotle and after', in S. Everson (ed.), *Companions of Ancient Thought*, vol. 4, Ethics (Cambridge, 1998), 221-240.
- [Sharples 1991] Sharples, R. W., *Cicero: On Fate & Boethius: The Consolation of Philosophy IV.5-7, V* (Warminster, Aris & Phillips, 1991).
- [Sharples 2001] Sharples, R. W., 'Determinism, responsibility and chance', in P. Moraux, J. Wiesner (eds.), *Alexander von Aphrodisias* (Berlin/New York, De Gruyter, 2001), 513-592.
- [Sorabji 1993] Sorabji, R., *Animal Minds and Human Morals: The Origins of the Western Debate* (Ithaca, Cornell University Press, 1993).
- [Weidemann 1999] Weidemann, H., 'Wetten, daß ...? Ein antikes Gegenstück zum Wettargument Pascals', *Archiv für Geschichte der Philosophie* 81 (1999), 290-315.
- [Zago 2012] Zago, G. 'Contributi critici al testo del *De fato* di Alessandro di Afrodisia', *Rheinisches Museum für Philologie* 155 (2012), 364-388.
- [神崎 2014] 神崎繁訳「ニコマコス倫理学」内山勝利・神崎繁・中畑正志編『アリストテレス全集 15』岩波書店，2014
- [近藤 2006] 近藤智彦「カルネアデスによる運命論批判——キケロ『運命について』から——」『哲学雑誌』121(793) (2006), 198-214
- [近藤 2008] 近藤智彦「アフロディシアスのアレクサンドロスによる運命論批判はアリストテレス的か？」『東北哲学会年報』24 (2008), 1-14

※本訳注の作成にあたって杉山和希氏（北海道大学大学院文学研究科）、川本愛氏（京都大学大学院文学研究科）の協力を得た。